

福岡県現代俳句協会会報

第 62 号

令和 4 年 12 月

年のような立食でのパ
ーティも中止というこ
とで、およそ一〇〇人
程でした。

大会は予定通りに午
後一時より始まりまし

た。まず、現代俳句協会の久保純夫副会長の
開会の言葉。

続いて、中村和弘会長の挨拶がありました。

次に、福本弘明大会実行委員長の挨拶と、
歓迎の言葉です。

第 5 9 回現代俳句全国大会 を北九州で開催しました！

令和四年十一月十二日(土)に、北九州市小倉
の JR 九州ステーションホテル小倉において、
九州では六年ぶりの「現代俳句全国大会」を
開催しました。

コロナ禍の中、「現代俳句全国大会」自体も
三年ぶりの実施ということで、開催自体も危
ぶまれる中でしたが、なんとか実施すること
が出来ました。

大会実行委員長が福岡県現代俳句協会の福
本弘明会長ということで、福岡県の役員を中
心にした大会実行委員会を立ち上げ、実施に
当たっての準備をしてきました。

そして大会当日。小さな手違い、ミスはあ
りましたが、皆様のご協力の下、なんとか無
事に大会を終えることが出来ました。

大会に関係された皆様、投句をしてくださ
った皆様ありがとうございました。

今度はまた六年後に北九州で開催されるこ
とになると思います。

なお、当日の参加はコロナ禍でもあり、例



挨拶をする中村和弘会長

その後、来賓紹介に続いて来賓の挨拶。

北橋健治北九州市長と山本修司毎日新聞社
西部本社代表のお二人のお祝いの言葉があり
ました。

そして、いよいよ協会各賞の顕彰です。

受賞者については前もって発表がされてい
たとおりで、各賞毎の顕彰になります。

受賞者は以下の通りです。

第 2 2 回現代俳句大賞

川名 大

第 7 7 回現代俳句協会賞

林 桂
堀田 季何

第 4 2 回現代俳句評論賞

岡田 一実

第 2 3 回現代俳句協会年度作品賞

松王かをり



松王かをり氏

岡田 一実氏

堀田 季何氏

林 桂氏

川名 大氏

続いて全国大会入選作品の顕彰になります。

第59回現代俳句全国大会優秀作品

現代俳句大会賞

尻といふ平和が並ぶ汐干狩

神奈川県海老名市 衣川 次郎

七夕やおとなになりませんように

兵庫県姫路市 石原 糸遊

毎日新聞社賞

窓の雪寝たきり妻の尿ぬくし

大阪府東大阪市 森 教安

朝日新聞社賞

卒業の以下同文を生きてゐる

山口県山口市 田村 葉

読売新聞社賞

手を置けば石語り出す広島忌

山口県周南市 伊藤恵美子

西日本新聞社賞

下校児がもうとんぼうになっている

徳島県海部郡 中川 秀司

時事通信社賞

ふらここの庭に戦車がやって来る

奈良県奈良市 寺町 容子

俳句のまちあらかわ賞

失言の多くは本音蟬しぐれ

北海道上川郡 中島 土方

北九州市長賞

蚯蚓鳴く骨無き兵の墓じまひ

兵庫県たつの市 杉原 青二

北九州市立文学館賞

逝く夏の廊下の奥をたしかめる

大阪府豊中市 波多 洋子



田村 葉氏

伊藤恵美子氏

福岡県からは受賞者なし。

最後に秀逸賞、佳作賞の表彰があり福本弘明大会実行委員長から賞状と賞品が渡されました。福岡県の受賞者を紹介します。

秀逸賞

どの紐も引つ張つてみる春の暮

太宰府市 山本 則男

すかんぼや不発弾なら家にある

みやま市 森 さかえ

離してはならぬ風船持たさるる

太宰府市 山本 則男

佳作賞

青信号炎天に人放たれる

北九州市 金子美智恵

紙風船突けば突くほど落ちたがる

太宰府市 山本 則男

濯いでも濯いでも八月の染み

北九州市 安倍 泰子

コロナ禍でもあり、受賞者の内、参加いただいたのは近くの山口県の田村葉氏と伊藤恵美子氏の二人。中村会長より賞状と目録が渡され、山口県現代俳句協会副会長の川村正浩氏よりお二人に花束が渡されました。続いて、特別選者特選句の表彰。残念ながら

本大会では九、一六八句の投句がありました。そのうち大会実行委員会で予選を行い、三、五四八句を一般選者に選をしてもらい、その内の高得点句を特別選者に送り、その選を合わせて各賞を決定しました。昨年は福岡県からの入賞はなかったのですが、今年山本氏の三句入選もあり、なんとか開催県の面目を保ったというところで。

大会各賞の顕彰のあと休憩をはさんで平出隆先生の講演がありました。

平出隆先生は、一九五〇年生まれ。詩人、批評家、造本家、多摩美術大学芸術学科教授などその活動は多岐にわたります。

出身は北九州市門司区で、俳句については正岡子規の住んだ子規庵保存会に属して正岡子規の未公開資料の研究を行ったりされています。今回は「蕪村を中心に」とテーマで映像を交えながら講演をしていただきました。

自身の造本家としての活動や、詩人としての活動を語られました。話が多岐にわたったり、話の骨子を理解できたかどうか……。

特に「野外をゆく詩学」と題し、「ポエジー」は文芸としての「詩作品」の外にも発生するのだということを、先生はさまざまなフイー



講演をされる平出隆先生

ルドワークを通してそれを確認していったということをお話されました。

アメリカの失われた野球場の数々を訪ねたり、ドナルド・エヴァンズという美術家の足跡を辿ってイギリスの孤島まで行ったこと。忘れられた詩人伊良子清白の作品とその生き方を探り、その旧居の移築保存に関係したことなど話されました。

また、郵便と書物、郵便と芸術活動へと話は発展し、フランツ・カフカの文学以上にその手紙と日記に魅了されたことまた、エミリー・ディキンソンの詩が世界への手紙であることに気づかされ事などを語られました。

最後に、俳句についての話になりました。俳句における「切れ」を「詩的切断」「詩的跳躍」と言いかえ、俳句を「a+b」という複素数で表すことが出来るというのです。

「i」を虚数といい、「b」という虚数部は失われたもの、存在しないものを表すということ。虚数 \parallel 共同の記憶(大きな時空)と、実数(aやb) \parallel 個人の経験(小さな時空)とが、互いに相容れない次元を作り、その虚と実とが反転しながらポエジーを作るといいます。稲づまや浪もてゆへる秋津しま 蕪村の「稲づまや」が虚数部(共同記憶)で「浪もてゆへる秋津しま」が実数部(個人の経験)のはずが、その関係が逆転し、切れを中心に回転運動を起こし、それがポエジーを生む。と、なかなか面白いが難しかったです。

会員特別作品二〇句

「つまりとは」 黒川 智子

かろうじて中年のうちエノキ割く
紙の本ほうれん草を茹でようか
冬苺みんな仲良く孤独です
煮凝やいろいろあつて何も無い
にんじんや男と男が近すぎる
タンシチュー 火星人も知れないね
つまりとはカリフラワーを茹でること
ポンカンや私ひとり幸せで
とりあえず煮込んでしまふ冬の月
オリオンへ回送電車走らせる
四八三十二あたりから冬の雨
水鳥はとうの昔に水となり
白南天ゾウのことなら昔から
しっぽから幸せになるキツネです
放屁虫はるかかなたに黒峠
神さまはお元氣らしい石路の花
水引草つづきは雨があがつたら
おすすめは菊の向こうの軽はずみ
寒菊が犬臭くつてたまらない
木の葉散るすべて散るまで伏せておく

会員二句競作

多くの人に投句をいただきました。

上月 大輔

北風はボクの口笛反戦歌
拷問の前だマスクを脱がされる

中川妃城子

放蕩のかぎり尽くして穴惑い
菊枯るるそれでよし良しと思う
かく住みて林檎を囓る暇はある

安徳由美子

近道は急な坂道鳥渡る
お日様の匂ひとりこむ掛布団
冬日ここまでたつぷり届く午後三時

矢野二十四

ミステリー隣で蜜柑剥く男
清掃車過ぎて冬木の街となる
ススキハラムジンキカヘルトコロナシ

香山つみれ

仕事終え一汁一菜菊日和
仕舞い湯と虫の声に溺れゆく
鎌研ぐを忘れておりぬ秋夕焼

秋風や二円切手をもてあます
この人の虫の居どころそぞろ寒
無花果ややくざな鴉せん回す

土田 利子

水中は平和なるらん鳩もぐる
椎の実の土に埋もれる安堵かな
落葉からから一枚づつにある歴史

中島直四郎

秦 夕美

大いなる影のよぎるや断腸花
あとさきは知らぬ存ぜぬ雁の空
水底に秋のひしめく古戦場

山際はるか

南都へと宇治橋渡る稲びかり
横顔は子規に如く無しラ・フランス
臥待や猫にも見ゆる相関図

福原 弘子

煮てもよし卸してもよし大根引く
ポケットは子の宝入れ木の実独楽
廃屋のふえゆく里やからす瓜

田中 葉月

天狼の影なきかげの飛びにけり
ハンガーにばさと掛けたる枯野かな
不知火や十戒にふれるは誰

山本 則男

一枚の白紙に戻る冬の蝶
凍蝶の崩れて風になりゆけり
考へる葦から枯れてゆきにけり

水城千恵子

虫喰ひの桜紅葉の目鼻立ち
川原コスモスゆらり確かな立ち上り
兜町のビルの地下室虫鳴く

広瀬 邦弘

「大将」はむかしのことよ今年酒
秋夕焼なんですんなに脳疲労
秋雷や清浄な爆弾とは如何に

坂本 晶子

低頭を直り大根の白さかな
温室に収まらぬ鉢もらひけり
一面の生き生きとして冬菜畑

原田 俊子

人の世の午後に花野のよく似合う
月の舟に乗らんと一歩よろけたる

中村 和男

父逝きて母の逝きたり寒北斗
寒北斗駅前ピアノの響きけり
コンビニのおでん買いたり妻の留守

中島 勝子

吊し柿先祖の魂に干し上がる
箸使い出来ぬ子多し文化の日
浮くとまと沈むトマトや稲光り

中村 重幸

八十路前まだ青蜜柑道半ば
木の実独楽行くえ定めぬ余生かな
除夜の鐘空白多い手帳替え

岩坪 英子

月までの距離掃ききよめたる非在
しめなわはゆるく朽ちゆき群雀
みかん買う母御の病みて友も病む

大瀬益太郎

それ以上滾れば萎る葉鶏頭
癒やすなどあづかり知らぬ鶏頭花
青空に跳ねしままなり吾亦紅

本多 進

都市の名を冠するタワー紅葉晴
地場産のふぞろいの柿つややかに
廃線跡は緑道石露の花

中西みつよ

虫の夜もうすぐ明日になる厨
マスクして視線の合わぬお辞儀する
妹の寝息に並ぶ天の川

松岡 耕作

円安の空港混みて秋暑し
秋日濃し老いばれなおも逃げまわる
いのししの看板はずれ家が建つ

木村 厚子

始まりはささやくやうに夜の雪
黙黙と冬の底まで穴を掘る
裸木となりてやさしき雲に会ふ

中島 芳昭

家族とは潮のごとし百合鷗
唐辛子少年の目が大人びる
飴色に滋味重ねてや吊し柿

三船 熙子

直球でやってくるのは暮の秋
裸木にふれてやさしい指となる
とりあえず逆らってみる寒の入り

山本 悦子

白桃をすすり羽化していくつもり
筋書きはいつでも変わる温め酒
百舌猛るあと一点を取り切れず

小倉 斑女

夜は朝を苛立ち迎へ霜の声
地獄とは地続きなりき冬の宿
絵のやうに海は動かさず冬の暮

森 さかえ

天国の門のあたりに赤まんま
悪しきもの呼びよせたらし蚯蚓鳴く
ぎんなんやみんなにこにこしてゐるね

鳥越 年高

古里へアクセル軽し秋の朝
去年今年ベターハーフは自家用車
隙間風防ぐはアルミサッシかな

玉井 葉子

どんぐりの肩寄せている番外地
冬麗の波の琴柱の幾尋も
穂薄の全霊風の譜となれり

堀川かずこ

ひと呼吸おいて書き出す文化の日
残る蚊の叩ける動き血の重き
引かれる手曳きずる手には千歳飴

川原 昌子

剪定の小枝を活ける式部の実
川沿いを埒へ急ぐ稲雀
台風圏閤に刻みし鳩時計

中村美津江

真ん中が晴れているのが葦の花
古墳とはみどりの雨が降るところ
句読点静かにたたむ水仙花

秋の海終着駅の直ぐ前に
不確かな恋の懸け橋秋の虹
一枚の紙と鉛筆文化の日

片山 亀夫

「ありがとう」覚えし二才の手に林檎
二才の走力じいじの秋は息ぎれ
冬ざれのキーウお腹をすかせてないか子等

倉迫 順子

一句鑑賞

笹鳴や万年筆が見つからぬ

川崎 展宏

藤田湘子氏が著書「20週俳句入門」で「型
そのI」の応用型のお手本として挙げられた
一句である。補聴器が行方不明になり探しま
くった私にとって実感させられる一句である。

鳥越 年高

秋深き隣は何をする人ぞ
彼一語我一語秋深みかも

松尾 芭蕉
高浜 虚子

秋も半ばをすぎると、いつも思い出す二句
である。やさしいことばで、ふと洩らしたよ
うなこの二句は、鑑賞しようとするのととも
手強い句である。読者とそれぞれが、それぞ
れの経験則に基づいて異なる鑑賞をすること
であろう。

中村 和男

妻ときて巻尺当つる雪の墓地 堀内 羊城

わが師、堀内羊城の句にしては何ともない
俳句であろう。師ならば、「俺にはもつと良い
句があるだろう」と、眉をすり上げたに違
ない。しかし、羊城師と同様の齢となつて、こ
の句の銜いのなさが現在の私の胸に刺さつて
くるのである。

理想家、皮肉屋、詩人、俳人としての師のや
さしさが垣間見える句。 中川紀城子

友よ我は片腕すでに鬼となりぬ 高柳 重信

掲句は折笠美秋氏の難病の見舞いのために
重信氏が自分の病の身もかえりみず、いろは
四十八枚の色紙に一枚一枚恢復を念じながら
一晚寝ないで書いた内の一枚と知りました。

われわれ凡人には重病の見舞にこの様な重
い色紙を四十八枚も貰ってどんなものかと思
いますがお互い、たぐい稀な天才どうしは私
のとても理解しがたい境地なのでしょう。

小倉 斑女

黄の青の赤の雨傘誰から死ぬ 林田紀音夫

雨のなか『林田紀音夫全句集』が気になつ
てきた。

もう四十年以上昔のことだが、「六人の会」と
いうのがあった。メンバーは赤尾兜子、佐
藤鬼房、鈴木六林男、林田紀音夫、高柳重信、
三橋敏雄で、このメンバーを選者とする「六
人の会賞」に何度か応募した縁で、この方々

とお付合い願った。前掲の句、A音が多く、
「死」の文字があるにもかかわらず妙に明る
い。 秦 夕美

セーター脱ぐ岸边に鳥を放つこと 茂里美絵

冬の岸边にひとり若者が佇み、真つ直ぐ遠
い海の向こうを見つめているのか。セーター
を無造作に脱ぎ捨てたその仕草が鳥を放つよ
うだと作者は感じたのだ。砂浜がぼかぼか陽
気で、ただ暑くなって脱いだのかもしれない
が。普段何気なくしていることを、美しい詩
に昇華させた力量と感性の鋭さと繊細さ。私
にとっての俳句の魅力はここにある。たった
十七音で人の心をつかんで離さない。

(茂里美絵「月の呟き」より) 田中 葉月

尻という平和が並ぶ汐干狩 衣川 次郎

尻この句は今年第59回現代俳句大会大会賞
を得た句である。皆沖へ向き家族総出の汐干
狩。並んだ春日に輝くお尻が眩しい。平和な
日本の春の風景。一つの実景から大いなる発
想、素晴らしい句と思う。

正眼の父の遺影に雪が降る 大牧 広

雪の季節になるとこの句を想い出す。正眼
は剣道の剣を相手の眼に向ける構え方で、お
父様は昔の警察官でもとても厳しかただった
らしい。その遺影に雪が降っているのが不
思議で仕方ないが、存命の時でも遠い方だった

のに、今はもうずつとずつと遠い所へ行か
れてしまった。もう聞けない。

全国大会歓迎吟行大会記

現代俳句全国大会が十一月十二日行われ、
その次の日十一月十三日(日)に、「全国大会
歓迎吟行大会」を北九州市門司区門司港レト
ロ地区で行いました。

会場は門司港レトロ観光物産館の二階にあ
る貸しホールです。

雨の予報もあり天気を心配しましたが、な
んとか大会開始時間には雨も上がり、無事に
開催することが出来ました。

一〇時から会場準備をし、十一時頃からぼ
つぼつ参加者が受付に来ました。

当日席題「終」を含めて三句の吟行句を投
句してもらいます。

門司港レトロ地区は、コロナの影響はあつ
ても、休日でもあり、多くの家族連れやアベ
ックで賑わっています。

前日の全国大会もそうでしたが、コロナの
影響で遠来の参加者が少なく、総勢二十二名
の参加でした。中には熊本から参加してくれ
た人が一名、思い思いのスタイルで句帳に取
り組んでいます。和やかな雰囲気の中で十二
時三十分に投句締め切り。

投句を清記しコピー、選句用紙と共に配布
して十三時に大会を開始しました。



選句の結果を披講、集計の結果三句が六点で
同点の最高得点。事務局の独断でそれぞれ天
賞、地賞、人賞としました。以下、五点、六点
を秀逸賞としました。各賞は次の通りです。

天賞

出征の碑に添いたるや石露の花

大木 吉廣

地賞

電飾の昼の冬木は処刑のごと

水谷 和子

人賞

冬立ちぬ軍馬の終の水飲場

山本 悦子

秀逸賞

跳ね橋のはねを濡らして初時雨

中村 和男

海風は父の小言か冬が来る

三船 照子

短日の棧橋畏の気配して

中西みつよ

旅人へ時雨やさしき終着駅

中西みつよ

あやまちのやうに冬のベンチ置かれ

田中 葉月

海の皺よせては冬を深くする

森 さかえ

続いて表彰式。片山亀夫副会長が天、地、
人、各賞の賞状と副賞を、続いて秀逸賞に副
賞を渡して表彰式を終わりました。

続いて合評会を片山亀夫副会長の司会で行
いました。吟行大会ということで、あまり難
しい句はなく、共感を呼びやすい句に得点が
はいった結果になりました。

以下が当日参加者の句です。

冬ぬくしせつかく傘を買ったのに

上野 一子

本州へ落葉とふたり最終便

鍋屋 立子

秋終るつまりバナナの被りもの

西村 楊子

不確かな恋の跳ね橋秋の虹

片山 亀夫

対岸に幼帝眠る冬の虹

谷口 詠美

海峡に予報通りの冬の雨

増本加津子

駅を出て一足お先のぬくめ酒

香山つみれ

虚子の碑に紅葉且つ散る風師山

冬の蝗コンテナ船とすれ違ふ

中川妃城子

晩秋やレトロの如しわが余生

遠山 へき

童女へと還る跳ね橋冬の風

中村 重幸

大型船行き交う海峡冬近し

堀川かずこ

終わりは始めサクと枯葉踏んでみる

倉迫 順子

しぐるるや関門橋は曲線に

大下真理子

全国大会に続いての吟行大会、お世話の皆様に参加者の皆様、コロナにめげずに参加していただき有難うございました。

前田 勝子

句会探訪

「ふくふく句会」

「ふくふく句会」は、福岡市中央区荒戸にある「福岡市市民福祉プラザ」で毎月第四木曜の十三時から十七時まで行われている句会です。参加者は一〇名前後、で各自一〇句を持ち寄り、それぞれ人数分用意しての合評会となります。十一月二十四日(木)の参加者は七名。当日の司会は森さかえ。それぞれ挑戦的な句を交えながらの一〇句に、遠慮会釈のない評が飛び交います。当日点の集まった句

かんたんに死ねないはなし日向ぼこ
聞いているふりをしてる都鳥

上野 一子

頬被りして三越で待つてゐる

神の留守何もなかったことにする

山本 則男

本当はいい人らしい鯨汁

何気ない仕草美し冬帽子

安徳由美子

黄落期いつも呼ばれる側に居り

冬支度些事怠らぬ母の居て

雪女郎またあたらしき物語

水洒れてむかしのひとのほひする

中西みつよ

我楽多の中の羽音や冬の星

狼ゆく星の林をぬけゆけり

森 さかえ

秋深しひとごとならぬ物忘れ
吊革の揺れに秋思の身をあずけ

松岡 耕作

来し方や渦状指紋のなかの露

指笛に散るを急げり木犀は

秦 夕美

秘密とは甘きものなり落葉焚

ありあまる落葉のごとく人死ぬる

矢野二十四

《会計からのお願い》

※令和4年度年会費(一千元)のお済みでない方は納入をよろしくお願いします。
納入は同封の振替用紙でお願いします。
なお、前年度の分が未納の方は併せて納入お願いします。(会計 上野一子)

福岡県現代俳句協会会報

令和4年11月(62号)

発行人 福本 弘明

編集人 森 さかえ

発行所 福岡県現代俳句協会事務局
〒839-0223 みやま市高田町岩津299

森さかえ方

TEL 0944-22-5332 Fax 0944-22-2530

印刷所 三池印刷